

秋田雨雀日記

第五卷

尾崎宏次編

未来社刊

秋田雨雀日記 第5巻

1967年11月15日 第1刷発行

定価 1,800円

編集 尾崎宏次

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川3の7

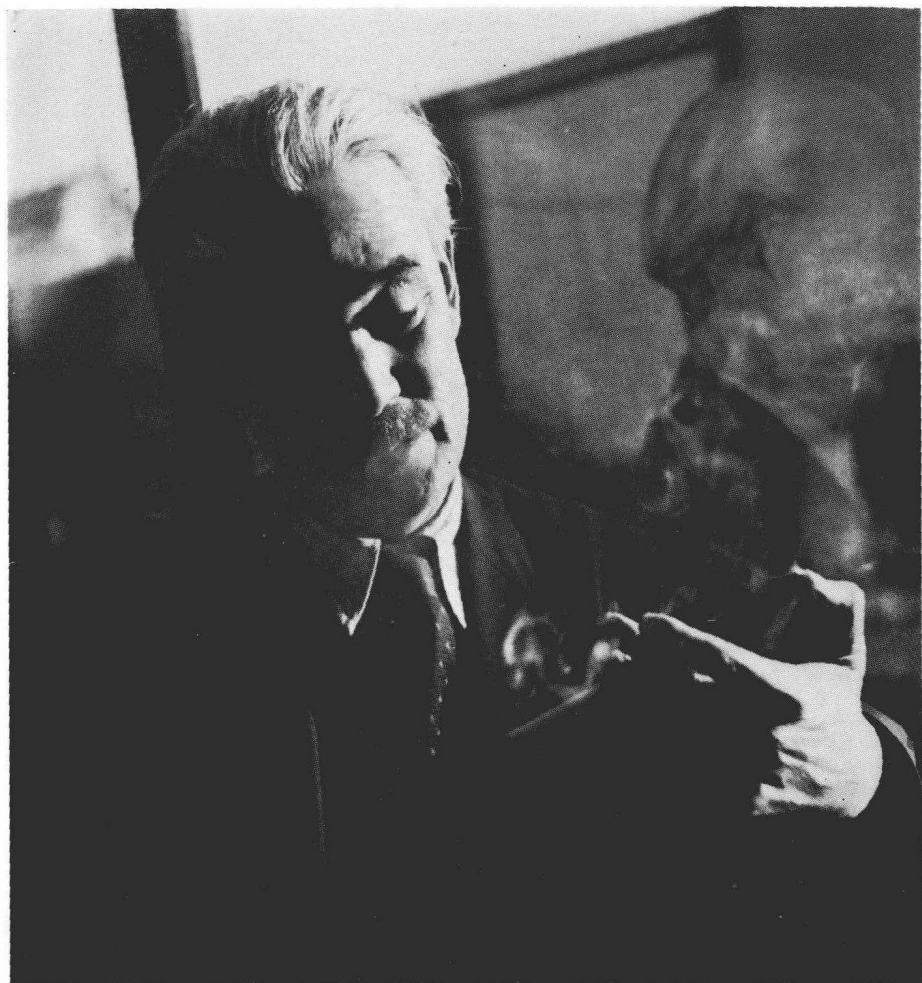
振替東京87385 電話(814)5521＝代表

製版／山洋印刷・電通印刷 印刷／萩原印刷

装本印刷・口絵／形成社 製本／今泉誠文社

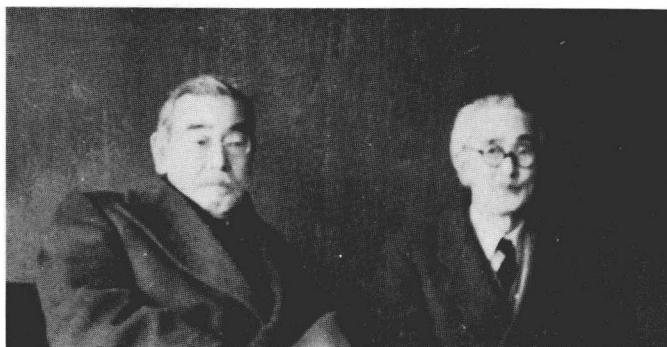
落丁・乱丁本はおとりかえします

©秋田いゝく



『北東の風』舞台稽古の日の雨雀（1938年，築地小劇場の廊下で滝沢修撮影）

大山郁夫と同席した時のスナ
ップ雨雀69歳



生誕77年記念の会で。右から
安倍能成，宇野重吉，雨雀
(1960年，東条会館)



小学館の招待で佐藤春夫と
(1960年，湯河原にて)



土蔵劇場30周年の会で神近市
子と(1960年，中村屋で)





同郷人の淡谷のり子と（1961年、西光院で）



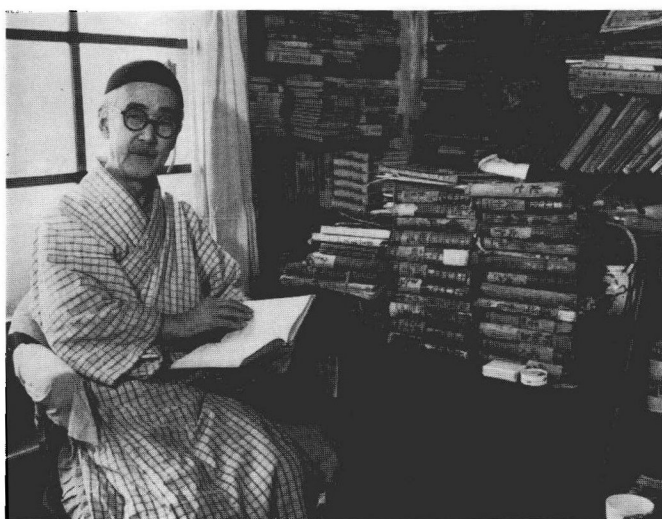
黒石市の名誉市民となった日
（1960年、黒石公民館で）



舞台芸術学院創立10周年祭、
（1958年、1, 2期生代表との
記念撮影）



晩年，板橋の自宅における雨雀



書きためた日記を手にする雨雀。机につんだのが古い当用日記（1953年）

日記の編集を終えて

尾崎 宏 次

『雨雀日記』の第一巻がでたのは一九六五年三月だった。それから二年あまり経ったいま、ようやく第五巻をだして、完成することができた。日記の整理にあたりだしてから、私はまる三年この仕事にかかりきりだったので、いま筆をおくだんになって、あらためて先生が根気よく日記をつけたものだ、という想いをあらたにする。晩年に、私の財産はこれだけです、と微笑をうかべながら洩らした言葉が、いま、私には特別の重みをもっておもいだされるのである。

一九一五年からはじまった日記は、ヒューマニズムから社会主義をとってコミニズムへとつながっていく個人の歴史であると同時に、いわゆる明治、大正、昭和という感覚でも受けとめうる文化史である、と思った。先生の死後、日記のページごと、そういう人生の波がしらをみる思いがした。

「刊行のことば」にも書いたように、はじめ、未来社と打合せときには、全四十七冊の日記をできる限り忠実にうつしとって、まあ、原稿は六千枚ぐらいであろうから、四巻で完結するだろう、という計画だった。しかし、一九二八年の滞ソ日記のように一ページも省略しないで全部収録したりしているうちに、だんだん枚数がふえて、七千枚を

超すようになって、第五巻までになった。

もちろん私ひとりでできた仕事ではない。私が整理した日記を筆写してくれた人たちがいるし、校正の段階では、鳴海完造、佐々木孝丸両氏にいっしょに眼をとってもらったし、未亡人のところにある写真だけでは足りないのを、わざわざ写真提供をしてくださったりした人もいた。そういう援助はみんな無報酬だった。第五巻にめんみつな雨雀年譜をかくてくださった小山内時雄氏もそうである。私にはどういう言葉でお礼をのべたらいいかわからない。ただ、地下で、先生がきつとよるこんでいるにちがいない、としか言えない。そういうふうにして、この日記五巻はできあがったのである。

この日記のなかに登場してくる人名は非常に多い。島村抱月や松井須磨子やエロシエンコからはじまって、政治家、文学者、演劇人、あるいは特に児童文学者、エスペランティスト、郷里の人びとまでふくまれ、そういうひろい人々と接触していた雨雀像をあらためて考えざるをえない。そして、雨雀の周辺にいた、この日記にでてくる人たちが、みんな先駆者の仕事をしていたのである。

雨雀は、はじめ、詩人であった。一九二二年に、持っていた英文の「ミルトン詩集」のなかに、

一、私はミルトンを愛す。ある意味ではシェークスピアよりも。

一、ミルトンを思うとダンテを思いだし、ゲーテを思いだす。

としるした。四十歳のころの言葉である。

雨雀は、また、社会運動家でもあった。ソヴィエート旅行日誌のなかに、

「私は個人的にはアナキストであり、社会的にはコミュニストです。」

という言葉がある。そういう両方のものが体のなかでうずまいていたようである。ただ、晩年の日記には、かなり感情的な部分があるのを、承知のうえで、カットしないでおいだ。私の知るかぎりというと、終戦後に上京してきたとき、すでに先生の片肺は完公に働く機能を失ってしまっていた。そのため、体調をととのえることがむずかしく、一時はノイローゼになって、ひどい不眠症におそわれた。疑いぶかくなっていて、しまいには、眼までとろんとしてしまい、私はもうダメかなと思ったことがあった。そんな状態でも、日記をつけている。

先生が世を去ったのは一九六二年だから、死後五年目に、この『秋田雨雀日記』五巻が完成したことになる。正直に言えば、私には、予想していたよりも、早く、刊行できたという思いがする。これは推薦者として名前をつらねてくださった十九人のかたがたと未来社のみなさんの御協力があったからできたことで、紙上をかりて、未亡人いくさんにかわって、深く感謝の意をしるしておきたい。

五巻が完結したところで、私は、ぜんぶの日記を、小田切進氏を通じて、近代文学館に寄贈した。未亡人の賛意をえたりえである。昨年、近代文学館で催されたトルストイ展に、日記は陳列されたが、四十七冊のぼろぼろの雨雀日記が文学史的な役割を、文学館で、はたすであろうことを祈って、やまない。

一九六七年七月

目次

日記の編集を終えて（尾崎宏次）	一
一九五五（昭和三〇）年	九
一九五六（昭和三一）年	六
一九五七（昭和三二）年	一〇
一九五八（昭和三三）年	一五
一九五九（昭和三四）年	二三
一九六〇（昭和三五）年	二六
一九六一（昭和三六）年	三四
一九六二（昭和三七）年	三四
註	三七
秋田雨雀年譜（小山内時雄編）	三七

凡 例

一、本書は、一九一五（大正四）年から一九六二（昭和三七）年に至る四七年間の秋田雨雀の日記を、若干部分の割愛をほどこしたのみで全五巻に年代を追って収録したものである。

一、収録にあたっては、故人の意志を尊重してすべてを現代仮名遣いにあらため読者の便をはかった。明らかに誤記と思われるものの訂正のほかはすべて原文に従い、無用の補筆・削除はおこなっていない。

一、日記中の長文のロシア語、エスペラント語の記録は、必要と思われる以外はこれを除き、欄外の心覚え、メモ等は、（……）内に入れてほとんどを収録してある。

一、日付の下の方★印は、その日付中の記録に編者の註があることを示し、それらは巻末に一括整理してある。但し註は、煩雑さを避け、必要最少限にとどめてある。

一、本書刊行の趣旨については、巻頭の「刊行のことば」を参照されたい。尚、最終巻に「秋田雨雀年譜」を付し、その生涯・著作活動等をあとづけたい。

一九六五年三月

編者 尾崎 宏 次

秋田雨雀日記 第五卷

一九五五（昭和三十）年～一九六二（昭和三七）年

一九五五(昭和三十)年

(重要出来事——後記)

(一)月——マレンコフ首相所信表明——世界民主青年連盟代表来日
——鳩山内閣人気とり——徳永直、岩上の二人が第二回全同盟ソヴ
エト作家大会に出席している。新日本文学会大会——薄田つま子死
——再会議会開会——議會解散——世界民青代表歓迎のリクリエー
ション——世界民青代表帰国

(二)選挙——岩波講座執筆——マレンコフ首相辞職、ブルガーニ
ン首相就任——同郷の世界的版画家棟方志功の家で会合——武藤直
治が死んだ——河上肇を戯曲化した人——民主党第一党、社会党は
合併すると第二党——志賀、川上ら——

(三)重光が渡米するなどといっている——昭和女子大焼失、女教
師焼死——(五日告別式)——相馬黒光女史の死——児童文学者協
会に反幹部的なものがあつた、脱会者も二三あるので中村屋で協議会、
明るい見通し——子供らを自由にしろ——ホイットマンを読みかえ
している——

(四)中国貿易使節団——アジア諸国会議代表出発——アメリカい

やがらせ——アンデルセン講演会(児童文学者協会主催)——シェ
ークスピア「間違いつづき」(研究科)——「人権と正義につい
て」(岩崎書店)——都知事、議員選挙——アインシュタインの死

(五)雨のメーデー「こどもの日のうた」(毎日)——「ハムレッ
ト」——「アメリカの声」——北富士演習地反対デモ——第五期舞
芸卒業式——

(六)日ソ交渉——保守合同陰謀——富士演習地農民は座り込み——
「ソ連をこらふた」(朝日)

(七)斎田君文部大臣賞——曹禺の「明るい空」、聶耳二十年(朝
日)——日共三十三周年記念視察——四巨頭会議——

(八)広島、長崎原爆記念日——徳田球一告別式——日共演説会野
坂、志田、紺野現われる——二つの平和祭(世界平和大会と日本の
ファッショ的国民祭)——細井和喜蔵三周年——中国、ソ連代表——
砂川基地問題——舞芸第二回総会——黒光女史追憶の下書

(九)湯河原(小学館)、重光帰国、在日基地の国府軍訓練——基
地問題全国的にひろがる形勢——アイゼンハワー病む——「土」上
演(演出研究所)

(十)台風北海道へ——新潟大火——中共建国六周年——猿之助大
成功——左、右社会党合同成立役員問題でもめ——小猫コロの
死——啄木歌碑——猿之助が帰った——中国見本市

(十一)「子どもを守る会」大会——26・27——児童文学者協会総会
——28——添田啞蟬坊頭彰碑除幕式(浅草弁天山)——大山郁夫の
死

(由) 一日郭沫若一行、中国科学院訪日視察團一行着京——臨時國會——京橋区国立近代美術館——「手」収まる——馮學長來訪——馮學長を囲む會——お茶水女子大——中國戲劇家協會のカムパ——大山平和葬——盛んな平和葬——寒い平和葬——

この日記の四月二日に和歌一首「人さしをわがてのひらに……」十月十九日に俳句「空は高い君はまだ旅に……」

昨年タバコをやめた！

夢二忌(雜司ヶ谷、茶屋)

夢二忌や小徑に白き苔の花

○

夢二忌に小徑をゆけば小雨降る

○

夢二忌にきつと夢を語る夢の人

雨 雀

今年夢二忌

夢二から絵物語をきいた水戸の秋

(水戸国立聾啞学校のおもい出)

一月一日

快晴！ 珍しい快晴！

朝、太陽に眼をさました。珍しく大みそかに家にいたので落ちつ

いた気分である。

ひるごろ、舞芸一年の学生たちが年始に来てくれた。お志ることを御馳走した。青森からきた餅はすてきた。寄せ書きをさせた。自分も色紙や短冊を書いた。合唱してわかれた。市田豊子も年始にこられた。

夜は長谷川誠一君、尾崎宏次(芳雄、謙吉)兄弟も年始にきた。短冊、色紙をあげた。

(この日記は少し重い。もらったから使うけれども、こんな重い日記は不便だ。学生たちが訪ねて来た。愉快！ 今月中岩波児童文学論)

一月二日

今日も午前快晴。日光が明るく照している。年始状のくるのがおそい。水野、飯岡の二君が来たのでお志ることを御馳走した。古賀という巡査(静江の友達——死んだ弁護士の家で寄宿している)が交通課の友人をつれてきた。酔っぱらってきたので不快だった。中村富子は親戚の家に年始に行った。

(飯岡、水野二君年始、マレンコフ首相所信表明(アメリカ通信記者))

一月三日

晴。正午から吉祥寺前進座へ行く。岸田国士の「召集令」舞踊「三人片輪」歌舞伎劇「奥州白石断」をやった。「召集令」はどうにもしっくりこないものだ。何か自然さを欠いている。村田(舞芸